食卓の至宝

長崎市立三川中学校　三年　上村　和奏

曽祖父と曽祖母は、数年前まで、米作りを行い、地域、そして私たち親戚にも配っていた。曽祖父と曽祖母の家では、五月から六月に田植えを行い、九月から十月ごろに地域の方と集まって、稲刈りを行っていた。曽祖父と曽祖母と同じ世代の地域の方々と集まり、笑顔を絶やさず、稲刈りをしていた曽祖父と曽祖母は、これまでにないくらい、とても幸せに見えたのが、印像に残っている。また、大切に育てた稲を収穫するときは、喜びと達成感を味わうことができた。収穫されたお米は、私たちの食卓に並ぶと、粒を立て、口に広がった瞬間、幸福感が全身に広がる。

お米の重要さは、幼い頃から、曽祖父や曽祖母、父、母から学んできた。日本人にとって、お米は主食であり、栄養素やエネルギーを豊富に含んでいる。その優れた栄養価から、私たちの元気な体を作り、健康維持に役立つ

食材として大切な存在である。お米は、日本文化や伝統の象徴でもある。そんなお米に、私は「感謝の心」を忘れず、残してはいけないと強く思う。

そして、私には、もう一つ、残してはいけないと強く思う理由がある。それは、私が通っていた小学校で行っていた募金のポスターを目にしたからだ。

そのポスターは、子どもたちが痩せ細っていた。世界のどこかの国では、食糧難に苦しんでいて、「いま、この瞬間にも。救える命がたくさんあります。」とも書いてあった。この言葉を聞いたとき、食べ物を残しているところを見ると、とても申し訳なく、後悔するようになった。さらに、衝撃を受けたのは、「五・六秒に一人、五歳の誕生日を迎えられずに消えゆく小さな命。」というものが今でもはっきり目に焼き付いている。私の知らない世界や国では、このように困っている人がいるのだと、すぐには、受け入れられ

なかった。同じ地球で起こっていることだと思うと、とても怖くなった。

私たちの暮らす日本では、食べたいものをいつでも簡単に、手軽に手に入れることのできる、とても幸せな国である。私の曽祖父や曽祖母、祖父、祖母が幼かったころは、まだ近くにコンビニなどはなく、芋を大切に食べていたと聞いた。しかし、現代では、近くにコンビニやスーパーなどがあり、白いお米をいつでも、どこでも手に入れることができる。

食べるものがないからといって困ることや、苦しむことはない。むしろ、いつでも、どこでも、食べたいものを手に入れることができるため、食べたいものが近くにあるということへの「感謝の心」が薄れてきてしまっているのではないだろうか。

曽祖父と曽祖母は、高齢でありながらも、米作りを、地域の方と供に行っていた。幸いにも、曽祖父と曽祖母が亡くなってからは、手伝ってくれていた地域の方が、米を作り続け

てくださっている。

食卓に並んでいるごはんは、たくさんの方々が関わってくださっているということ、また、そのたくさんの方々の愛情が込められているということを忘れずに、大切にごはんを食べていかなければならないと強く思う。

私たちが今できることは、一目の前にあるごはん、誰かが調理してくれたごはんを残さず、大切に食べることではないだろうか。そして、笑顔があふれる世の中になってほしいと思う。

20×20